Peace Seeds

ヒロシマの10代がまく種

核兵器廃絶の願いを伝える方法は、さまざまあります。芸術で広めるのも、方法の一つです。中国新聞ジュニアライター15人は10月29日、被爆地からアートで平和を発信した「ヒロシマ・ナガサキZERO PROJECT」に参加しました。写真や音楽、映像、Tシャツ、詩、絵の中で思いを表現しました。

広島国際文化財団が協賛するこのプロジェクトは、米国のNPO法人「1Future」が呼び掛けました。代表のキャノン・ハーシーさん(40)は原爆被害をいち早く世界に訴えたジャーナリスト、ジョン・ハーシーの孫です。今回はさまざまなアーティストや市民と協力して、広島市中区の妙慶院を主な舞台に作品を制作しました。

心の中の気持ちを、多くの人にアートで伝えようと試みる作業は、自分と向き合う時間になりました。これから言葉の違いを乗り越え、世界の人と理解し合うきっかけになればと思います。

> ◇ピース・シーズ◇
> 平和や命の大切さをいろんな視点から捉え、広げていく「種」が「ピース・シーズ」です。世界中に笑顔の花をたくさん咲かせるため、中学、高校生の25人が自らテーマを考え、取材し、執筆しています。

第50号　アートで平和発信

私もヒロシマの表現者

写真

平和記念公園を巡った写真チーム。スマートフォンで折り鶴を撮影した

折り鶴 広がる願い重ねる

秋空の下、平和記念公園に飛び出し、平和にちなむ物を写真に収めました。原爆資料館の周辺や原爆の子の像、原爆ドームなどを1時間半かけ、思い思いに巡ります。自分が「これは」と感じたら、スマートフォンのカメラを使って撮りました。

広島の写真家、高田トシアキさん(55)に教わり、けなげに咲く花、雲の浮かぶ空、白い石畳、カメラを構えるメンバーの姿などにレンズを向けます。画像は写真共有アプリ「インスタグラム」から、共通のハッシュタグをつけて投稿。アップされた写真を、妙慶院に用意したプリンターで印刷しました。各自でお気に入り作品ベスト5をパネルに張り発表しました。

原爆の子の像にささげられた折り鶴の写真などを選びました。一羽一羽は広島県内外の人が、気持ちを込めて折ったもの。多くの鶴が集まった様子は、平和への願いが広くつながっているようなイメージを与えてくれました。

音楽

身近な物を楽器にして演奏した音楽チーム

身近な「楽器」でハーモニー新鮮

身の回りで音の出る材料を探しました。紙コップや、近くの平和大通りに落ちていた小石や木の枝、ドングリなど、意外なものも「楽器」です。見つけ出したら自分でリズムを即興でつくり、振ったりたたいたりして、どんな音が出るか調べます。最後は全員で輪になって音を出し合い、一つの曲を作りました。

名付けて「広島トライバル（民族的な）ミュージックバンド」。講師の大阪市の音楽家、岡野弘幹さん(53)の合図で一人一人が音を重ねていくと、心が弾むような躍動感のある曲が演奏できました。岡野さんは「物をたたくなどして音を楽しむことが音楽本来の姿。みんなで耳を澄ませ音を聴き合うことは世界平和につながる」と話します。

私たちには新鮮な体験になりました。終わった後のメンバーの笑顔は忘れることができません。みんなと喜びを共有することで世界平和は実現が可能なんだな、と思いました。

映像編集

原爆ドームなどの映像に平和メッセージを合成する映像チーム

手書きでPEACE 呼び掛け

米国ワシントン州にあるオリンピック大の教授、ピーター・ビルさん(47)に教わって、プロジェクションマッピングを作りました。被爆樹木や原爆ドーム、広島の街並みなど、あらかじめ収録された映像に、自分たちで書いた平和メッセージを加えました。

実際に筆ペンを使ってメッセージを書く手元を撮影し、編集ソフトで映像と合成します。平和記念公園の映像を背景に、「PEACE」などと英語で書きました。他の人も「平和」という漢字や笑顔のマークをあしらい、一つのオリジナル作品に仕上げました。

完成作は夜、ライブコンサートのあった元安川親水テラスで上映されました。作品自体は短い時間になりましたが、制作には自分たちが関わった部分だけでも半日かかりました。その分、平和についてゆっくり考えることができました。

Tシャツ　詩・絵

「平和行きの切符」のTシャツ

シルクスクリーンを使ったTシャツ制作のチームでは、被爆樹木などをデザインした約20枚の版から、好きな柄を選んでプリント。米国の芸術家キャノン・ハーシーさんが言うには、印刷のずれも「個性」です。

「平和（Peace）行き」の電車の切符をイメージしたオリジナルも作ることができました。自分なりに平和をどう表現するか考える機会になりました。

詩のチームはミュージシャンの佐野元春さん(61)が講師。よりよい明日▽大事な君▽届かない声▽痛みと怒り―をテーマに個人で詩を作り朗読、感想を述べ合いました。佐野さんは「読み手に共感を与える詩を作ろう」と強調します。言葉一つ一つの意味と力をじっくり考えることができました。

「平和のために何ができるか想像力を働かせて」と話してくれたのはイラストレーターの黒田征太郎さん(78)です。袋町小（中区）で一緒に絵を描きました。復興した広島の街や、原爆のきのこ雲を逆さに見立てたフラスコの中に平和な地球を閉じ込めた姿など、自由にペンを走らせました。

ピース・シーズ 50号

「ピース・シーズ」は、被爆70年の2015年1月に始まり、今回で50号を迎えました。私たち10代ならではの視点で、平和について問題を切り取り、伝えています。

10代向け テーマ工夫　取材通じ思いも深める

創刊から参加する岡田実優（高2）

毎回自分たちでテーマを考え、取材、そして原稿の執筆を続ける「ピース・シーズ」。創刊号から関わってきた私が最も大切だと思うのは、どんな取材テーマにするか、ということです。

平和を中心に、幅広くみんなで案を出し合います。原爆や戦争にストレートに向き合うだけでなく、折り鶴や歌、花などさまざまな角度からもアプローチ。一番悩んだのが、漫画をテーマに決めた第33号でした。同世代に親しみやすい内容ですが、作品数が多く、どこに焦点を当てるか議論を重ねました。最終的に戦争体験のない漫画家が原爆をどう表現しているか、取材することに決めました。

毎回、普段関わることのない人や立場の違う中高生に話を聞けるので、自分も新しい視点を持って、思いを深めることができます。これからも、10代が身近に平和を考えてくれるような紙面を作っていきたいです。

これまでの主なテーマ

- 被爆100年　2045年の広島
- ホロコーストを学ぶスタディーツアー
- ジュニアライターが見たNPT再検討会議
- 平和を呼ぶ歌
- ゴジラと核兵器
- フクシマ３高校の新聞
- 21世紀の原爆漫画
- 中国残留孤児たちは今
- フェアトレードって何？
- 呉空襲を考えた
- 知ろう、動こう核兵器禁止条約

この取材は、高２岡田実優、中川碧、岡田輝海、沖野加奈、松崎成穂、井丸貴拡、高１平田佳子、川岸言統、中３フィリックス・ウォルシュ、川岸言織、中２岩田諒馬、田所愛彩、平松帆乃香、中１林田愛由、桂一葉が担当しました。

次回は12月21日に掲載します。
ジュニアライターが取材後の感想をつづった「編集後記」を、中国新聞ヒロシマ平和メディアセンターのウェブサイト（http://www.hiroshimapeacemedia.jp/?p=78128）にアップします。